

ルネサスが
SANYOに
 選ばれた理由。

協力:  Microsoft Office

- 広告** 第2回『内部統制とITフォーラム』講演内容をWebで好評公開中!! 主催:日経
広告 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減ー富士通
広告 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定
広告 [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

ビジネス・ネット時評(日経デジタルコアより)

更新:3月23日 23:07

通信・放送融合 タブー廃しチャンスに変えよ(中村伊知哉)

AT&Tが地域通信大手のベルサウスを買収するという。アメリカ通信業界はAT&T、ベライゾンの2強時代に突入する。ソフトバンクがポータフォン日本法人を買収するという。日本は3強時代となる。通信分野はダイナミックに動いている。行政も事後チェック型の競争政策に移行している。

かたや放送はどうか。昨年2月、ライブドアとフジテレビの攻防が勃発。11月には楽天とTBS。その結果、結局なにごともなし。まことに安定している。放送は地上デジタルの完成に邁進しており、行政も従来型のインフラ整備政策が続く。このようにダイナミズムの異なる両分野がどう融合するのか。



中村伊知哉・スタンフォード日本センター研究所長

通信・放送融合の議論が本格化している。政府、産業界、学界、マスコミ、いずれも意見が行き交っている。私は2月27日付け日本経済新聞「経済教室」に「二分法を抜本的に見直せ」と題する問題意識を寄稿した。インハイのストライクと違って投げたが、ビーンボールだとのお叱りも受けた。あれが危険球だあ？よけ方がヘタだぜ。この場では新聞で書けなかったもっと内角を試してみる。

ふたたび日本は追いかけるのか

92-93年、私は郵政省で「融合」を担当していた。当時「融合」は行政上のタブーであった。昨夏ようやく情報通信審議会が「融合推進」と記すところまで来た。「放送コンテンツを通信ネットワークで活用することは日本にとってメリットが大きい」とする主張は12年空転したのだ。そして今、日本はブロードバンドで世界をリードしている。チャンスである。

しかし日本には2つの波が来ている。まずアメリカ。今年の冒頭、Google、Yahoo!、マイクロソフト、Appleといったネット系、コンピューター系の巨人がハリウッドのコンテンツを引っ下げてネット映像サービスを世界展開することを宣言した。日本の業界が融合か連携かといった言葉遊びをしているうちに、根こそぎ持って行かれはしまいか。

次に韓国。テレビとネットの結合サービスで先行している。行政対応でも、情報通信部がイニシアチブを発揮している。今になって日本では通信行政とコンピューター行政の組織統合が議論されているが、98年の省庁再編当時、通信行政を委員会にして政府の外に出す議論に終始していたのはどの国だ(私が政府を離れた理由の一つがこの議論だったので、誰が何を言っていたかは忘れない)。

5年前に策定したe-Japanは米韓へのキャッチアップ政策だった。それが成功し、世界のトップランナーになったと政府は胸を張る。この年度末でそれも区切りを迎える。が、融合問題でまたも日本は米韓の後追いをしたいのか。せざるを得ないのか。

タブー廃する議論尽くせ

そこで総務大臣の「通信と放送の在り方に関する懇談会」に期待がかかる。先日、慶應大学で開催された「日韓メディア融合政策シンポジウム」の席上、大臣秘書官の岸博幸さんが語った。「世界の中の日本の状況を第一に考えるべきだ。」そのとおり。外から見ればピンチであり、構造改革のチャンスである。

是非タブーを排する議論を尽くすべきだ。ひとしきり議論をしておけば、制度や政策というものは、技術やニーズに沿って自然に動いていくものだ。今の状況は、93-94年、「融合」「デジタル放送」というタブーが打破された頃の空気に似ている。2006年を日本のチャンスとして生かしたい。

方向性は明らかだ。技術進歩の恩恵を利用者・国民が享受できるよう、制度的なネックを解消することである。そのためには、通信・放送の二分法を再編することと、技術中立・オープンな行政へと転換することの2点が求められる。

<< 前のページへ 1 [2] 次のページへ >>

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)
- メディア融合時代における「競争」と「公益」の調和・竹中懇最終報告に寄せて(金正勲)
- IT人材不足を解消するためにすべきことは何か(前川徹)
- 利用者の視点からコンテンツ活性化を考える(大木登志枝)
- 「ネットで働ける」社会は本当に来るのか?(田澤由利)
- 携帯電話の「自己触媒的」発達・グローバル市場で強みとなるか(土屋大洋)
- 産業と融合する通信インフラ——ネットワーク社会の新たなアーキテクチャーとは(荒野高志)
- ネットワークは中立的か?——日米の議論の潮流を読む(谷脇 康彦)
- MVNOの第2ステージが始まった(本荘修二)
- 個人情報保護法から1年で見えてきたこと(高木 寛)
- 知らずにインストールされる「アドウェア」(帆場英次)
- ユビキタス、センシング&コンテキスト化のインパクト(碓井聡子)
- 通信・放送融合 タブー廃しチャンスに変えよ(中村伊知哉)
- これでいいんかい、国の委員会<その6>(関根 千佳)
- 少子高齢化時代のICT利活用への期待(片瀬 和子)
- 「Web 2.0」はパスワードか?(湯川 抗)
- 本当にユビキタスな情報社会へ向けて(土屋大洋)
- 個人情報保護法と暗号(内田勝也)
- 到来した「超」カスタマー・セントリックな時代(江川 央)



NIKKEI NET

新製品